

2025.12.21.

「主をあがめます」

旧約 詩編34編2～11節

新約 ルカによる福音書1章39～56節

1. はじめに

今朝、私共はイエス様のご降誕を覚えて、クリスマスの礼拝を捧げています。この後、洗礼式が執り行われます。聖靈なる神様のお働きの中で、神様の救いの御業が明らかにされる時です。それはまるで、洗礼を受ける方に天からのスポットライトが当たり、神様がこの方を愛し、救うことを宣言される時だということです。私共はその出来事の証人となります。クリスマスのこの時、私共は聖書に記されている神様に選ばれ、召し出され、神様の救いの証人とされた人たちを思い起こします。何人もいます。その中で、今朝はイエス様の母となったマリアと洗礼者ヨハネの母となったエリザベトの二人に集中して、御言葉を受けたいと思います。

2. マリアとエリザベト

先週の主の日に受けた御言葉において、マリアは天使ガブリエルから聖靈によって「**いと高き方の子**」「**神の子**」を生むと告げられました。マリアはすぐにこれを受け入れることは出来ませんでしたけれど、「**神にできないことは何一つない。**」と天使に告げられ、遂に神様の救いの御業に用いられることを受け入れ、「**わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。**」と答えました。今朝与えられている御言葉は、その後のことです。

「そのころ」と始まっていますが、それはマリアが天使ガブリエルのみ告げをうけて、それを受け入れた後ということです。マリアはエリザベトに会うために、ナザレからユダの山里に向かいました。ユダの山里というのがどこなのかはつきりは分かりませんけれど、エルサレムやベツレヘムの近くの山里と考えますと、聖書の巻末にあります地図6を見ればナザレから直線で優に100km以上あります。道を歩けば200km位はあったでしょう。ちょっと行ってくる、という距離でありません。10日はかかると思います。マリアがエリザベトの所に向かった理由は、天使がマリアに「**あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。**」(1:36)と告げたからでしょう。神様の御業として、聖靈によって身ごもったマリア。そして、高齢になっていたのに神様の御業によって身ごもったエリザベト。マリアもエリザベトも、他の人に言ったところでまともには聞いてもらえない。まして、「分かる、分かる」「私と同じね」「何と素晴らしいこと」と言って共感してもらうことなんて出来ません。しかし、エリザベトなら分かってもらえる。そう思って、マリアはエリザベトに会いたかったのではないでしょうか。神様の御業によって身ごもるということを経験している二人です。共に神

様の恵みを受け取った者同士として、自分が経験したことを分かち合い、共に神様を讃め讃めたいと思った。このマリアの思いを、私共は良く分かるのではないでしょうか。神様の恵みの出来事を経験しても、それを信仰と同じくしていない人に言っても、中々分かってもらえません。しかし、主にある兄弟姉妹なら分かってくれる。そして、共に神様を讃め讃め、祈りを合わせることが出来る。これは、私共の信仰の歩みにおいて不可欠なことです。私共の信仰の歩みというものは、この信仰者の交わり中で為されて行きます。キリストの教会は「証し」というもの大切にしてきました。神様が私にしてくださったことを語り、そして聞くことによって、本当に神様は生きて働いておられるということを改めて知らされ、共に御名を讃め讃めてきたわけです。

3. 何と幸いなこと

マリアはエリザベトの家に着きます。すると、マリアを迎えたエリザベトは、すぐにマリアが救い主・メシアを身ごもった方、キリストの母となる方だと分かりました。聖書は「エリザベトは聖靈に満たされて」そのことが分かり、マリアに向かって「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。1:43 わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださることは、どういうわけでしょう。」と告げています。マリアは、この言葉を聞いて本当に嬉しかった。何も説明せずに、私の身の上に起きたこと、神様が私に為したことを探っている人がいる、分かってくれている人がいる。マリアは本当に喜んだ。そして、マリアは「エリザベトの所に3ヶ月も滞在してから自分の家に帰り」ました。いったい3ヶ月も二人は何していたのかと思う方もいるでしょう。エリザベトにとってこの3ヶ月は、身重になって6、7、8ヶ月目の時ということになります。お腹がどんどん大きくなって、日常の生活も中々大変になって来る頃です。特にエリザベトは超超超高齢出産です。お祖母さんと孫ほどに年の離れた二人でしたけれど、その関係はまことに麗しいものでした。私は素朴に、マリアはお腹の大きくなっていくエリザベトの日常を支えたのではないかと思います。そして、二人にとって日々はとても穏やかで、喜びに満ちた日々だったのではないでしょうか。

4. マリアの歌① マグフィカート

そして、マリアは歌います。46節以下です。この「マリアの賛歌」と小見出しが付いている歌は、教会の長い歴史の中で「マグニフィカート」と呼ばれ、毎日の祈りの時に唱えられてきた、とても大切にされてきた歌です。この「マグニフィカート」という言葉はラテン語で、この歌の一番最初の言葉です。意味は「大きくする」です。47節の「わたしの魂は主をあがめ」と訳されている言葉の「あがめ」と訳されている言葉です。つまり、「わたしの魂は主をあがめ」とは、「わたしの魂は主を大きくする」ということです。神様を私共の心の中で大きく、大きくする。もっとも、神様は別に私共が大きくしなくとも大きな方なのですから、「神様の大きさを認め、受け止める」

ということです。神様が大きく、大きくなりますと、私は必然的に小さくなります。これが「謙遜」というものです。マリアが48節で「**1:48 身分の低い、この主のはしためにも／目を留めてくださった**」という言葉は、この意味で受け取らなければなりません。マリアの「主のはしため（奴隸り女）です」と言う言葉は、自分のことを卑下しているのではなくて、天と地の全てをもってお入れすることの出来ないほどに大いなる方、天と地の造り主である神様の御前に立って、自分の小ささ、愚かさを知らされた者としての言葉です。これが聖書の告げる謙遜です。聖書が告げる「謙遜」とは、他の人と比べてどうのこうのという話ではありません。私共は放っておけば、自分が大きくなろうとします。自分が大きくなって、周りの人の上に立とうとします。自分があがめられようとします。それは個人においても、民族や国家というレベルにおいても同じです。しかし、あがめられるべきお方、大きくされるべきお方、それは私ではありません。神様だけです。

そして、この大いなる神様の御前において、自らが大きくなろうとすることから自由になったとき、私共は「**神様を喜ぶ**」者となります。「神様を喜ぶ」とは、神様が自分の願いを叶えてくれるから喜ぶということではありません。神様が私を愛してくださり、神様の御業に私を用いてくださり、神様の御心に適う者として生かされることを喜ぶ。今、神様と共にあることを喜ぶということです。神様に造っていただいた本当の自分が回復され、神様との親しい交わりの中に生きる者とされたことを喜ぶということです。何か目に見えるものを手に入れたから喜ぶのではありません。神様との新しい命の交わりを喜ぶ。マリアはそのような新しい自分として生きる者とされたことを喜びました。私共も実にこの喜びに生きるようにと招かれています。ありがたいことです。

5. マリアの歌② 幸いな者

さて、マリアは続けてこう歌います。「**1:48 身分の低い、この主のはしためにも／目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も／わたしを幸いな者と言うでしょう、 1:49 力ある方が、／わたしに偉大なことをなさいましたから。**」マリアは、聖霊なる神様によって神の御子を身ごもるという、驚くべき神様の御業を我が身に受けました。小さな自分を選び、用い、神の御子イエス様の母として立ててくださった。何と驚くべき御心でしょう。この神様の愛、御心、ご配慮というものを注がれた私は、何と幸いなことか。これから後の人たちは、私のことを幸いな者と言うでしょうとマリアは歌います。マリアは、自分に注がれた神様の愛、慈しみを覚えて、自分は何と「幸いな者」かと歌ってたわけです。しかし、この「幸い」は単純ではありません。何故なら、婚約していたマリアがヨセフとの間に子が与えられるのではないわけですから、ヨセフが何と言うだろうか？父や母は、家族は何と言うだろうか？私の言うことを信じてくれるだろうか？人間の常識的な見通しからすれば、とても幸いとは言えない明日が待っているとも言える状況です。しかし、マリアは「幸いだ」と言うのです。天地の造り主である全能の神様が、私に目を留めてくださり、私を選んでくださり、偉大な御業を為してくださったからです。この幸いを御使いガブリエルは知

っていました。ですからマリアに対して「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」との挨拶を告げたのでしょう。

このマリアの「幸い」について、エリザベトは「**1:45** 主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」と告げました。この二つの幸いは繋がっています。神様が自分に目を留め、愛してくださった。その幸いの中でマリアは、自分が聖霊によって身ごもり、神の御子の母となるという神様の言葉を受け入れ、信じるという幸いへと導かれてました。神様に選ばれる幸いがあり、その選びを受け入れ、応えていく幸いがある。二つの幸いは一つながりです。私共も、この幸いへと導かれています。私共は、小さな者ですけれど、神様に忘れられた者ではありません。神様の愛のまなざしの中に生きています。だから、神様は私共の必要の全てを備えてくださっている。私共は、何事もなく過ごすことが当たり前で、何かあったらとんでもないことだと思います。しかし、「何事もなく」ということは、神様の憐れみの御手の中に生かされている「しるし」なのでしょう。更に、神様は私共を神の子・神の僕として新しい命に生きる者へと導いてくださり、神様に「父なる神様」と祈る者としてくださいました。なんと幸いなことでしょう。神様に目を留めていただき、大いなる御業に与ったのはマリアだけではありません。全てのキリスト者の上に、神様の愛は注がれており、私のために神様はその慈愛に満ちた全能の御業を為し続けてくださっています。クリスマスを迎える度に、私共はこのマリアと同じ幸いに生きる者とされていることを、喜びと感謝をもって心に刻むのです。

6. マリアの歌③ 神様の革命

最後に、51～53節を見て終わります。「**1:51** 主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、**1:52** 権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、**1:53** 飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます。」ここだけを見ますと、社会的に力ある者と弱い者とを逆転させる、革命的な変化をこの世界に神様はもたらすとマリアは歌っているように受け取る人もいるかもしれません。しかし、ここでマリアが歌っているのは、そういうことではありません。何故なら、そのような社会的な変革、革命のようなことは今まで何度も起きました。しかし、そこで起きたことは権力者や富める者が変わっただけで、この世界の有り様は少しも変わっていません。マリアがここで歌い、神様が与えようとしているのは、そのような世界ではありません。この世界においては「権力ある者」そして「富める者」が、まるで自分が主人であるかのように思い違いをし「思い上がり」、我が世の春を歌っているように見える。逆に、「身分の低い者」や「飢えた人」は、社会の隅に追いやられ、まるで価値の無い者のように扱われる。あるいは、自分でもその様に思ってしまう。しかし、そうではない。ここでマリアは、「私を見れば分かります。神様は私のような弱く小さな者に、神様は目を留められました。そして、この地上の誰よりも大いなる栄誉、神の子の母という地位を与えられました。この地上での身分も富も権力も、神様の

御前では何の意味もありません。あなたも神様の憐れみの中で生かされています。」 そう高らかに宣言しています。

このクリスマスの時、マリアからお生まれになった神の御子イエス様は、飼い葉桶に寝かされたことを私共は知っています。イエス様のお父さんの仕事は大工であったことも知っています。そして、イエス様の誕生を天使によって知らされたのは、羊飼い達であったことを知っています。みんな権力ある者でもなければ、富める者でもありませんでした。しかし、そこに神様の御心がありました。また、イエス様に宝を捧げた博士達は、エルサレムから見て東の方角、つまりメソポタミアから来た者であることを知っています。つまり、彼らは異邦人です。彼らにもイエス様の救いの門は開かれました。私共も異邦人です。貧しい人も飢えた人も異邦人も、みんな神様の憐れみの中にある。それがマリアが歌ったことでした。私共は権力ある者でもありませんし、富める者でもありません。また、敬虔な者でもなければ、特別善人というわけでもありません。しかし、神様は私共を選び、イエス様の十字架によって一切の罪を赦していただき、神様の子・僕としていただきました。ありがたいことです。イエス様が来てくださらなければ、私共は今もこの世の富や地位や名誉を追い求め、それが自分の幸いの源であるかのように思って歩んでいたことでしょう。そして、それが得られなければ、自分は神様からも相手にされない、価値の無い者であるかのように思っていたことでしょう。しかし、イエス様は来られました。神様が私に目を留めてくださり、愛を注いでくださり、大切な者として扱ってくださいます。そして、御名を讃美讃え、あなた様と共に生きる者にしてくださいました。何と幸いなことでしょう。この幸いの中に行き切ることが出来ますよう、心から祈り願うものです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

今年もクリスマスを喜び祝うことが出来ますことを心から感謝いたします。あなた様の救いに与ることがなければ、クリスマスを心から祝うこともなかつたでしょう。この地上にあって、あと何回のクリスマスを祝うことが出来るか分かりませんが、イエス様を我が主・我が神として心に迎え、力の限り御名を讃美讃えさせてください。あなた様を大きくして、眞の謙遜を身につけて、あなた様の愛の眼差しの中で、あなた様が与えてくださる幸いの中に生き切ることが出来ますように。今日、洗礼を受けて、あなた様の子とされる兄弟を祝福し、あなた様と共に歩みを備えていくください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン